

東書

最新

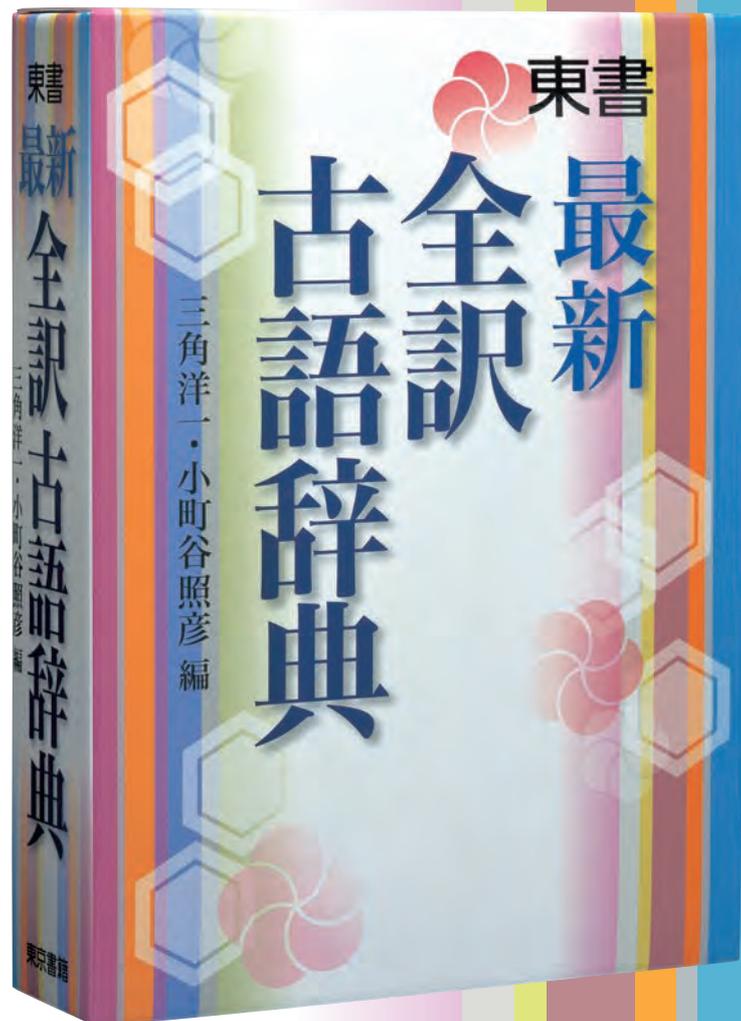
全訳

古語辞典

授業から大学入試まで、

古典学習に必要な情報が満載。

古典の世界を深め、見やすく分かりやすい最新刊！



編集委員

三角洋一

小町谷照彦

2色刷

B6変型判・五三六ページ

総収録語数約二三、〇〇〇

定価二、八六〇円(本体二、六〇〇円)

ISBN 4-427-39500-9

東京書籍

A3641

代表語義欄で  
多義語の意味を一望

こてふらく-こと

**【事】名**  
 ① 行為。動作。  
 ② 行事。仏事。儀式。  
 ③ 仕事。任務。政務。  
 ④ 出来事。出来事。現象。  
 ⑤ 重大な事。一大事。  
 ⑥ 事情。状況。事情。わけ。  
 ⑦ ようす。ありさま。  
 ⑧ 《食事》食事。僧の夜食。  
 ⑨ 《形式名詞》…すること。  
 ⑩ 《感嘆》…ことよ。…ことだなあ。  
 ⑪ 語源的には「言」と同じとされている。「事」と「言」は中古までは混用されている例も見られるが分化していった。一般的に形を備えた物体を表す「もの」に対して、動作・作用・性質、あるいは物どうしの関係などを表す。

こてふらく【胡蝶楽】コトフラク舞楽の曲名。四人の子供が背に蝶の羽の形を著したものをつけた衣装を着て、山吹の花をかざして舞う。法会時のときなどに演じられた。「胡蝶」  
 こてん【呉天】コテン【呉】は中国南部にあった国のことで、呉の国が都の長安から遠く隔たっていたことから遠い異郷。また、遠い旅の空。例「こてんに白髪の恨みを重ぬといへども」(奥の細道 草加) 詠「奥羽地方への旅を思い立って」遠い旅の空で髪の色が白くなってしまうようなつらい思いを重ねるけれども



こてふらく (舞楽図屏風より)

豊富な図版で  
ビジュアル面から  
古典を知る

重要語以上は  
二段組の《対訳式》

② 行事。仏事。儀式。  
 例「この御子三つになり給ふ年、御袴着のころと」  
 《源氏・桐壺》  
 ③ 仕事。任務。政務。  
 例「我が待つ君がこと終はり帰る籠りて」  
 《万葉・八四二・長歌》  
 ④ 出来事。現象。  
 例「よごとに、黄金があらる竹を見つくることかきなりぬ」  
 《竹取・かぐや姫の生ひ立ち》  
 ⑤ 重大な事。一大事。事件  
 例「殿などのおはしまさで、世の中のこと出で来、さわがしうなり」  
 《枕草子・殿などのおはしまさで後》  
 ⑥ 事情。わけ。意味  
 例「いかなることにか、と見えたり」  
 《源氏・夕顔》  
 ⑦ ようす。ありさま。  
 例「あながちなることはなきも」  
 《源氏・夕顔》  
 ⑧ 食事。僧の夜食。  
 例「或る人ことをしておくりたりけるに」  
 《著聞集・三〇》  
 ⑨ 《形式名詞》として用言および助動詞の連体形の下に付いて「作用・状態などを表して…すること」  
 例「うつくしきことかきりなし」  
 《かぐや姫の》かわいらしいことは、このうえ

《俗事》を急いで」  
 例「この皇子が三つにおなりになる年に、お袴着の儀式を」  
 例「私の待っていたあなたが任務を終えて(都から)帰って来られて」  
 例「節々と節の間の空洞ごと、黄金が入った竹を見つくる出来事がたび重なつた」  
 例「殿(藤原道隆)がお亡くなりになって後、世の中に事件が起こり、不穏なことになつて」

《竹取・かぐや姫の生ひ立ち もない》  
 例「文を」こと」で止めて」(断定の意を強めたり、感嘆の意を表したりして)…ことよ。…ことだなあ。  
 例「かの男は、天の逆手」を打ちてなむのろひ(「まじないの一種」)ををるなる。むくつけきこと打って呪っているとかいうことだ。気味の悪いことだなあ」  
 例「伊勢・丸」  
 こと【異】コト形容動詞の語幹の名詞化)別のもの。違うもの。例「明日になれば、ことをぞ見給ひ合はする」と。《枕草子・清涼殿の丑寅のすみの》「あすになったら、(古今和歌集の)別のもの(別の本)を(女御)がご参照になると(天皇は)お考えになつて」  
 こと【琴】コト弦楽器の総称。琴。和琴。琵琶など。例「御前に御ことども召す」(源氏・少女)「冷泉(冷泉帝)は御前に弦楽器をいくつか持つてこさせなされる」(口絵「管弦・舞楽」)  
 ② 特に、十三弦の箏。現在の琴。  
 ③ 琴を弾くこと。琴の演奏。例「宮中一の美人、この上手にておはしける」(平家・六小督)「小督は宮中で最高の美人で、琴の演奏の名人でいらつした」  
 形動【ナリ】(ならなりになりなる)なれなれ  
 例「(他とは)違つている。異なつている。また、やつと違つている」  
 例「衣を着せつる人は、(天の)羽衣を身に心ことになるなりといふ」  
 例「人は、心が(地上の人と)違つているようになるのだという」  
 例「(殊)格別だ。特別だ。特別にすぐれている」  
 例「かくことなることな(「こういう格別にすぐき人を率ゑておはして、時めかし給ふこそ」)  
 《源氏・夕顔》特別にひいきになさるの

用例は教科書や  
入試問題で頻出の  
作品・場面から選出

# 和歌見出しには 丁寧な解説

たび-とうぐう

たび【旅】家を離れて、一時、よその場所にいること。また、その途上。遠方に限らず、近くの場所に出かける場合もいう。例「都なる荒れたる家にひとり寝ばたびにまさりて苦しかるべし」(万葉集・四〇〇)。「都にある荒れたわが家にひとり寝たら、旅(たび)をしてひとり寝る」ともまじって、いっそうつらいことである。例「暮らして文化」(庶民と旅)。

たびにやんで…【俳句】旅に病んで。夢は枯れ野を かけ廻る(八坂。日記・芭蕉集)。例「旅中病に倒れ、夢でなおあちこちの枯野を駆けめぐっている」(季冬・枯野)。「元禄七(一六九四)年十月八日、死の四日前の作。『病中吟』と前書き。『笈日記』には、支考に「なほかけ巡る夢心」とするのとちががよいかと推敲を重ねていたようすなどが記されている。これが芭蕉最後の句となった。

東海道中膝栗毛(とうかいだうちゅうかたがひ)【書名】江戸時代後期の滑稽小説。八編十八冊。十返舎一九(1780)年刊行。江戸の町人弥次郎兵衛と喜多八郎を主人公に江戸から伊勢・奈良・京都・大坂に至るまでの道中記。途中の二人の滑稽で愚かな失敗談を中心に、折々の狂歌、各地の風俗、方言などが軽妙に描かれている。好評を博し、金比羅宮島参詣(みやまのまゐり)をしてから江戸に帰るまでの続編が書き継がれた。例「刊行年を文化九(一八一二)年まで、あるいは文化十一(一八一四)年までとする説もある」(暮らしと文化「庶民と旅」八九頁)。

東海道四谷怪談(とうかいだうよぐわいだん)【演目】江戸時代後期の歌舞伎脚本。世話物。五幕。四世鶴屋南北(なんぼく)作。文政八(一八二五)年、江戸中村座で初演。南北怪談物の代表作。「四谷怪談」ともいう。例「歌舞伎鑑賞」(東海道四谷怪談)。

とうぐう【等覚】(名)仏教語。①仏の異称。②修行によって菩薩(ぼさつ)が到達する最高の位(いざな)。(名)【書名】(現) ↓東関紀行(とうぐうきんぎょう)【同行】(名)①同じ志をもって仏道の修行に励む人。特に、浄土真宗で信徒のこと。例

現代仮名見出しで  
探したい語も  
すぐ見つかる

た

歌舞伎鑑賞 東海道四谷怪談(とうかいだうよぐわいだん) 怪談好きの歌舞伎狂言作者鶴屋南北(なんぼく)の集大成作品。日本の代表的な怪談物である。初演は文政八(一八二五)年江戸中村座。お岩が幽霊となつてたるといふのがおおかまなストーリーだが、歌舞伎を見ると、その原因や背景、世界の深さに驚かされる。一人の役者が三役を早替わりで演じたり、髪梳(かみかみ)き、戸板返し、仏壇返し、提灯(ていとう)を教えるなどの舞台上の仕掛けは、芝居の楽しさを教えてくれる。同時に人生の光と闇とを克明に描き出して見せてくれるあたり、歌舞伎ならではの醍醐味(たごみ)である。読むよりも見るほうが断然おもしろい作品の代表。

とうぐうなりける人(とうぐうなりけるひと)【書名】(新古今・哀傷七曲・詞書)「同じ志をもつて仏道の修行に励む人であった人が、連続して亡くなつてしまつたので」。

②道連れ。同行者。特に、いっしょに寺社へ参詣(まゐり)しに行く人。例「室(むろ)の八島(やしま)に詣(まゐ)りす。とうぐやう(とうぐう)會長(くわんちやう)が曰(いは)く「奥(おく)の細道(ほそみち)の室(むろ)の八島(やしま)に現在の栃木(とちぎ)の南西部(なんせいぶ)にある大神(おほがみ)神社(じんじゃ)に参詣(まゐ)る。同行者(どうぎやう)の河合(かゐ)會長(くわんちやう)が述(のたま)へることに」。

どうぎやう【童形】(名)「とうぎやう」ともいう。①元服前(もとむかひ)の髪(かみ)を結(むす)っていないおかつば頭(かぶ)の子供(こども)。また、その姿(すがた)。稚児(わらわ)姿(すがた)。

②貴人(きいじん)の元服(もとむかひ)以前の称(なづな)。

とうぐう【東宮・春宮】(名)①皇太子(みかど)の御殿(ごてん)。「春(はる)の宮(みや)」(名)「かくて、あて宮(あてみや)、とうぐうにまゐり給(たま)ふ事(こと)、十月五日(じゅうがつごにち)とさだまりぬ」(宇津保(うづね)あて宮(あてみや))。このようにして、あて宮(あてみや)が、東宮(とうぐう)に参上(まゐ)ることは、十月五日(じゅうがつごにち)と決定(けつぎん)した」。

皇太子(みかど)の御殿(ごてん)は皇居(みやげ)の東(ひがし)にあるので「東宮(とうぐう)」といい、また、東(ひがし)は中国(ちゆうごく)の五行(ごぎやう)説(せつ)で春(はる)にあたるので「春宮(はるみや)」と当(あた)る。

参考 情報で  
知識を深める

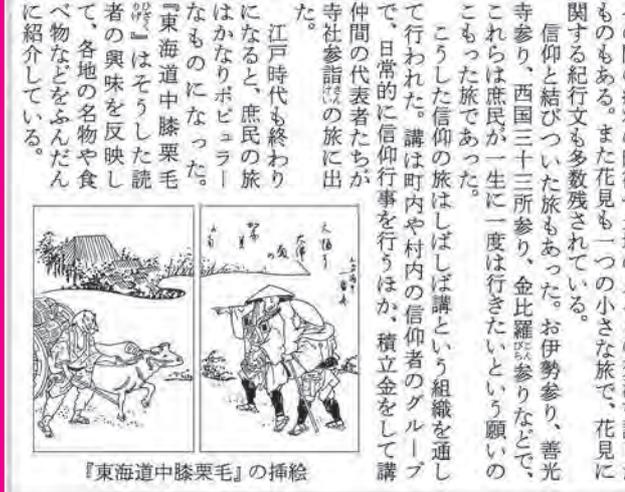
暮らしと文化 庶民と旅 鎌倉時代(かまくら)ごろから、旅はある程度安全にできるものになつてきたといわれる。「十六夜日記(じゅうろくやに記)」を書いた阿仏尼(あぶに)が旅をしたのは六十歳(あるいは七十歳)説(せつ)もあり)だつたとされてお、高齢(こうれい)の女性が困難(くわんなん)を伴(とも)ながら京都(きょうと)から鎌倉(かまくら)へ無事(むじ)に行くことができたのである。

江戸時代(えど)になると、さまざまな旅の形態(かたち)が出てくる。その多くは生活(せいかつ)や仕事(しごと)のためのもので、それらについて書かれた紀行文(きぎやう)が多く残(のこ)されている。例えば武士(ぶし)が勤務(くわんむ)のために地方(ちほう)をめぐって記録(きらく)を取(と)るという形(かたち)のものがあ、調査(ちやうさ)・研究(けんきゆう)的な性格(せいかく)を合わせもつものもある。一方、温泉(おんせん)に療養(りやうやう)のために滞在(たざい)し、その間の病状(びやうじやう)の回復(かふく)や土地(ち)の人々(ひと)との交流(かうりゅう)を記したのもある。また花見(はなみ)も一つの小さな旅(たび)で、花見(はなみ)に関する紀行文(きぎやう)も多数(たうすう)残(のこ)されている。

信仰(しやうぎやう)と結びついた旅(たび)もあつた。お伊勢参(おいせまゐり)、善光寺参(ぜんくわうじまゐり)、西国三十三所参(さいごくさんじゅうさんじよ所まゐり)、金比羅参(きんぴらまゐり)などで、これらは庶民(しやうみん)が一生(いっせい)に一度(いちど)は行(い)きたいという願(ねが)ひのこもつた旅(たび)であつた。

こうした信仰(しやうぎやう)の旅(たび)はしばしば講(こう)という組織(そくし)を通して行(い)われた。講(こう)は町内(ちやうない)や村内(むらうち)の信仰者(しやうぎやう)のグループで、日常的(じやうじき)に信仰(しやうぎやう)行事(ぎやうじ)を行(い)うほか、積立金(つみたてがね)をして講(こう)仲間(なかつま)の代表者(だいひやくしや)たちが寺社参詣(じしゃまゐり)の旅(たび)に出(い)た。

江戸時代(えど)も終(お)わりになると、庶民(しやうみん)の旅(たび)はかなりポピュラーなものになつた。「東海道中膝栗毛(とうかいだうちゅうかたがひ)」はそうした読者(よめい)の興味(きうみ)を反映(はんえい)して、各地(ちがひ)の名物(なぶつ)や食べ物(たべもの)などをふんだんに紹介(せうかい)している。



上代から近世まで  
幅広いコラム  
暮らしと文化

八一九

本文組見本 (125%拡大)  
この見本ページは複数箇所からの抜粋により構成されております。

歌舞伎の世界を  
紹介する  
歌舞伎鑑賞



## ◆ 文法解説がわかりやすい

古典学習において特に重要な、助動詞の文法解説については、活用と活用形を見出し語冒頭に活用表で掲載。また、付録（「まぎらわしい語句の識別」）や見返し（「助動詞活用表」）など、つまずきがちな文法事項を目につきやすく、学習しやすいような工夫をこらしました。

### き

〔助動〕「特殊型」  
《接続》原則として活用語の連用形に付く。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(せ)	○	き	し	しか	○

ただし、カ変・サ変動詞には特殊な接続をする。

カ変 「く(来)」	未然形「こ」	連用形「ぎ」
	こし・こしか	きし・きしか
サ変 「す(為)」	未然形「せ」	連用形「し」
	せし・せしか	しき

### まほし

〔助動〕「シク型」  
《接続》動詞や助動詞「る」「らる」「す」「さす」「しむ」などの未然形に付く。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(まほしく)	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	○
まほしから	まほしかり		まほしかる		

▲本文1197頁より

▲本文401頁より

## ◆ バックアップ機能でわかりやすい

多くの見出し語の中から、関連する情報が確実に得られるさまざまな送り表記を入れました。また、参考情報では、語義の解説だけではわからないことばの使用法なども解説しました。

### ● 初学者に使いやすい「現代仮名見出し」「空見出し」

かわす【交わす】(現) ↓ かはす  
かわず【蛙】(現) ↓ かはづ  
河竹黙阿弥 モクアミ【人名】(現) ↓ 河竹黙阿弥(かはたけもくあみ)  
かわたれどき【彼は誰時】(現) ↓ かはたれどき  
河内 カワチ【旧国名】(現) ↓ 河内(かはち)

### ● 関連する見出し語がすぐにわかる「参照送り」

おほくらーしゃう【大蔵省】オホクラ【律令制で、八省の一つ。諸国から納められる租税の出納や銭貨・度量衡りょうりやう・売買価格などの事務を行った。「大蔵おほのの省つか」【大蔵おほの】 ↓ はっしやう(八省)

### ● ことばの説明だけにとどまらず「参考情報」

しょうでん【昇殿】シヨウテン【「サ変」平安時代以降、清凉殿せいりやうにある殿上でんじやうとの間にのぼることを許されること。例「大内だいないの守護しゆごにて年久としひさしうありしかども、しやうでんをば許されず」(平家・四・鶴) 〔源頼政げんらいせいは〕宮中守護職として長年勤めていたが、昇殿を許されなかった。〔参考〕昇殿が許されたのは、五位以上の中から家柄などで選ばれた者と六位の藏人ざうじんである。このうちの三位さんみ以上の者と四位よんいの参議さんぎを「上達部じやうたつぶ」と称した。昇殿を許されない者は「地下ちか」と呼ばれ、殿上人との社会的地位の差は大きかった。

▲本文688頁より

▲本文273頁より

▲本文397頁より

### ◆ 古典の世界を広げる見出し語 二万三千語

学習に必須の見出し語に加え、地名・人名や、和歌・俳句などの固有名詞、また歌舞伎・浄瑠璃演目など、これまでにないさまざまなジャンルのことばを収録しました。

### ◆ 「主要作品解説」で 重要な作品の世界をつかむ

古典文学の中で特に重要とされる作品二十三作品と、作者三人について、それぞれあらずじや成立の背景などを詳しく解説しました。授業では一部分しか扱わない有名作品の全体をつかむことができます。

#### ● 見出し語の例

【地名・歌枕】

明石の浦／香炉峰／清水／住吉／櫛の小川／日光街道

【人名・作中人物名】

新井白石／柿本人麻呂／空海／竹田出雲／小野小町  
源頼朝／かぐや姫／光源氏／葵上／世之介

【作品・演目名】

浮世風呂／義経記／後拾遺和歌集／西鶴大矢数／夜の寝覚  
仮名手本忠臣蔵／国性爺合戦／出世景清／義経千本桜

#### ● 「主要作品解説」に収録されている作品例

古事記／万葉集／古今和歌集／蜻蛉日記／源氏物語  
枕草子／平家物語／風姿花伝／奥の細道／雨月物語



▲本文1443頁より

# ◆ 豊富なコラムで古典の世界の知識を深める

古典の世界をもっと深め、もっと楽しむために、コラムを豊富に掲載しました。

◆身近な古典芸能のひとつである歌舞伎について、

有名作品十六作品の戯曲を解説・鑑賞したコラム **歌舞伎鑑賞**

## 歌舞伎鑑賞

### 恋飛脚大和往来(まどわらい)

寛政八(一七九六)年大坂で初演された歌舞伎芝居だが、原作は近松門左衛門作『冥途の飛脚』を改作した菅専助(かき)作『けいせい恋飛脚』。人形浄瑠璃(じやうるり)の戯曲である。主人公の忠兵衛は現金や手紙を運ぶ飛脚屋。遊女梅川(うめがわ)と深い仲の忠兵衛は、梅川が他の客に身請けされると聞き、友人の八右衛門から金を借り手付の金を打ったものの、残金のめどが立たない。そのうえ八右衛門に、廓(かむら)で借金のことをさんざんに言い散らされ、かつとなった忠兵衛は、ふところを持っていた武家屋敷に届ける三百兩の封印を切ってしまう。封印を切れば、公金横領の罪で死罪は免れない。恋ゆえに身を滅ぼす男の刹那(せつな)。ここは興奮して思わず封印が切れる型と、男の意地から自分で切る型の二種類の演出があり、見せ場の一つとなっている。男女の愛を柔らかな写真芸で見せる上方和事(わじ)の代表的な芝居である。忠兵衛と八右衛門の言い争いは深刻でありながら笑いを誘う場面展開で、歌舞伎独特の上等な演出法である。

▲本文551頁より

◆上代から近世まで、幅広く興味深い記事を満載した **コラム 暮らしと文化**

## 暮らしと文化

### 橘(たちばな)の花散る里のほととぎす

夏を代表する鳥であるほととぎすは『万葉集』の時代から数多く歌に詠まれ、さまざまなイメージを伴うものとなった。多情で居所が定まらない、もの思いや思慕の情をかきたてる、懐日の念を起させる、といったものがそれである。鳴き声については陰暦五月になると人里に飛来し「こずえ高く鳴く、曉(あけ)や五月雨(ごご)の深更に鳴く、血を吐くほど声をふりしほって鳴く、冥途(よみ)に往来し』しでのたをさ(諸説あるが、「死出の田長」と解されることが多い)と鳴く、などとされる。また、ほととぎすはしばしば橘の花、卯の花、藤の花と取り合わせて詠まれ、『古今和歌集』に「時鳥(ときどり)我とはなしに卯の花の憂き世の中に鳴きわたるらむ」(夏・云・凡河内躬恒、「我が宿の池の藤波(ふぢなみ)咲きにけり山時鳥(やまときどり)いつか来鳴かむ」(夏・三・詠み人知らず)などがある。

『源氏物語』花散里(はなぢり)巻には、次の場面がある。須磨(すま)への退居を控えた光源氏はつかの間の平穩を求めて、かつて淡い愛情を交わした花散里を訪問しようとする。そして五月雨の晴れ間に、故桐壺(きとぎわ)帝に仕えた麗景殿(れいけい)の女御(によう)にむき、その妹君の花散里と対面する。折しも往時をしのばせるほととぎすが飛来し、香り高い橘の花の木で鳴いた。光源氏は「橘の香を懐かしみ時鳥花散る里をたづねてぞ訪(と)ふ」(昔の人を思い出させる橘の香りに心ひかれて、ほととぎすの私はその花の散るこの邸を探して訪ねて来た」と女御に詠みかけた。それに対し、女御は「人目なく荒れたる宿は橘の花こそ軒のつまとなりけれ」(訪れる人もなく荒れ果てたこの邸は、軒端に咲く橘の花だけが、昔をしのぶほととぎすのあなたを誘い出すよすがとなった)と返す。光源氏の歌は、『古今和歌集』の「五月(ごご)待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(夏・三・詠み人知らず)や、『万葉集』の「橘の花散る里の時鳥片恋しつづ鳴く日しそ多き」(八・四四五・大伴旅人)をふまえたものである。

▲本文 1160頁より

## 暮らしと文化

### 蹴鞠(けまり)

蹴鞠は貴族が好んだみやびな遊戯。中国伝来とされ、延喜から天曆のころ(十世紀前半から中葉)に普及した。

柳・桜・松・楓などを四隅に植えた「懸かり」という専用コートの中で、八人の「鞠足(けまりあし)」(「蹴技者」が技を競った。

松の根元にいる蹴技者「上鞠(かみけまり)」が、三度けり上げてから最初のパスを出す。その後、鞠を落とさず何回パスが続くかを競った。「懸かり」の周囲には、「見証(けんじやう)」(審判員)が数人いて、独特の節回しで回数を数えた。千点を最高点としたが、五百を越えることはほとんどなかったらしい。

「アリ」や「オウ」などのかけ声とともに鞠をける際、腰や膝を曲げず、端正優雅な姿であることも求められた。鞠は鹿革(か)で作り、直径二十センチ程度であった。『徒然草』一七七段には、降雨の後の「懸かり」に、おがくずや乾いた砂をまいたことが記されている。

蹴鞠の歴史の中で名人も出現した。『古今著聞集』(寛政)巻十一に登場する藤原成通(ふじわらなるみち)(一〇九七—一五九?)は、「懸の下に立つこと七千日」に及び、病気でふせっているときも、足には鞠を当てていた。また、ある時、鞠を高くけり上げたら雲の中に入り、そのまま見えなくなってしまったとも語られている。

こうした成通の超人的な蹴鞠の力量に、鞠の精霊も感服のあまり、その姿(顔は人間の児童のよう)で、手足は猿)を現したという。

『源氏物語』若菜上巻で、柏木が女三の宮の姿を見たのは、光源氏の邸宅六条院で蹴鞠をしているときであった。柏木の蹴鞠の技量については、「足もとに並ぶ人なかりけり」と書かれている。

現在では、毎年一月四日、京都下鴨神社で「蹴鞠初め」が奉納されている。

■口絵「蹴鞠」

本文 ▶ 495頁より

